

民国連携による地域一体となった鳥獣害対策活動について

ー若桜町におけるニホンジカ対策の取組ー

近畿中国森林管理局 鳥取森林管理署

若桜町産業観光課 課長補佐 山本 伸一

鳥取森林管理署 森林技術指導官 國永 一彦

1 課題を取り上げた背景

若桜町は鳥取県の東南端に位置し、総面積2万ヘクタールのうち、約95%の1万9千ヘクタールを森林面積が占める、中国山地の深い山々に囲まれた町であり、国有林も5千ヘクタール所在します。このような豊かな森林資源を背景として、若桜町の林業は、かつては智頭林業と並んで中国地方の代表的な林業地の一つと位置付けられ、吉川地区産出のスギが皇居豊明殿の天井板に使用されるなど、町の象徴的な基幹産業でした。しかし、近年の過疎化・高齢化の進展等による若年人口の流出により、耕作放棄地や限界集落等の社会問題が発生するなか、町内では野生動物、とくに民家の軒先にまで出没するニホンジカによる農林業被害が顕著となり、町民の生活にも大きな支障を来しています。

2 取組の経過

平成21年度に、このような状況に対応すべく、関係機関により「若桜町鳥獣害対策協議会」を結成しました。平成23年度からは鳥取森林管理署も会員となり、ニホンジカ等による農林業被害の防止及び地域住民の生活環境を保全するための活動を連携して行っています。協議会の具体的な活動として、猟友会員等による銃器やくくり罠などにより、平成22～25年度



罠による捕獲状況

には年間500～1,000頭のニホンジカを捕獲しました。また、昨年度からは、町内に4基設置した罠により年間10頭あまりのニホンジカを捕獲し、今年度は5基に増やして捕獲体制を整えています。

3 実行結果

以前は、捕獲したニホンジカ個体は、自己消費分を除いて、大部分が止め刺し後に埋設処理されていましたが、最近注目されている「ジビエ」の影響もあり、若桜町においても、厄介者であるニホンジカを活用した地域おこしが始まりました。

昨年の8月には、八頭町と共同利用する獣肉解体処理施設「わかさ肉工房」が始動し、そこで解体されたニホンジカの肉は、カレーライスやサイコロステーキなどのジビエ料理として町内の道の駅やレストランなどで味わうことができます。また、皮革職人を育成する工房がオープンし、鹿皮製の洗顔クロスなどを販売しています。



シカ肉の調理（下ごしらえ）

4 考察

これらの取組に続き、今後さらにどのような展開を図るべきかを検討するため、「ニホンジカの肉の可能性を探る」という意味のアンケートを、先駆的活用地域の関係者、外食業界、食肉加工業界、ペットフード業界、動物園に対して実施しました。このアンケート結果をもとに、ニホンジカの肉の新たな流通先等の開拓（ジビエとしての活用）を耕作放棄地や限界集落等の社会問題を解決する一つのきっかけ（触媒）として新たな活動をおこして行きたいと思います。